

**Cooperative Conversation and Communication Strategies--
Through the Analysis of Discourse Between Learners
and Native Speakers (Non-teachers)**

Ken-ichiro Haruhara

The Association for Overseas Technical Scholarships
Tokyo Kenshu Center, Japanese Language Section

There is a wide gap between "teacher talk" and "ordinary Japanese (non-teachers)." Many learners are faced with various troubles in communicating with the latter.

Against this background, I conducted this research which aims at investigating communication problems faced by learners and native speakers when they tried to communicate each other, and strategies taken by both sides to overcome these problems.

This time, I specially focused on "Cooperative conversation skills." The following are used as data:

- (1) Tapes which recorded communication between learners and native speakers.
- (2) Interviews with native speakers.
- (3) Questionnaires of learners and native speakers.

「共話とコミュニケーション・ストラテジー
—日本語学習者と一般日本人（非日本語教師）との談話分析を通して—」

春原 憲一郎
(財) 海外技術者研修協会
東京研修センター

0. はじめに
1. 本研究の目的
2. 調査について
 - 2-1. 調査対象
 - 2-2. 調査方法
3. 調査結果
 - 3-1. 調査①「学習者とボランティアの談話分析」について
 - 3-2. 調査②「ボランティアのアンケート分析」について
 - 3-3. 調査①と②の比較
4. 調査結果分析と考察
5. 今後の課題

0. はじめに

多くの成人日本語学習者にとって、長期に渡って集中的に日本語を学習する機会は少ない。いきおい、短期プログラム学習か散発的学習にならざるをえない。その結果、日常生活や社内生活の中で学習戦略を駆使できるかどうか、学習の継続・深化に大きくかかわってくる。日常生活や社内生活では、教員ではない人々との交流または日本語教材ではない一般メディアを通して、新しい語彙や概念、表現方法を獲得していかなければならない。特に、技術研修生向けのアンケート調査等によると、研修の現場で、専門家同士が共通の既有知識を活かして、コミュニケーション上の問題を解決していく型（→「JSP」Japanese as Specific Purpose：特定の目的のための日本語）よりも、人間関係形成に関わるいわゆるオジャベリ型の会話に関して、その難しさが指摘されている。現在、JSPの教材、カリキュラムはいくつか開発されている。しかし、その業務や研修の要になるのが、社内外の人間関係である。谷口1989も指摘するように、会話の特徴は、「話者と聴者の役割は固定しておらず、たえず入れかわる」ところにあり、それは話題に関して、教える学ぶという関係に関して同様である。ある意味で、オジャベリ型会話というのは、専門学習より難しいといわれる所以である。報告者は、一般日本人との交流の戦略を体験・学習させるため、教育現場にボランティアを導入している。外国人とのコミュニケーションという問題を考える時、ボランティアというのは、いわば教員以外の一般日本人のフロンティア的存在であり、

そこで双方に有意義で、達成感のもてる活動が設計できるかどうかは、今後の大きな課題である。

1. 目的

本研究では、学習者と一般日本人との接触場面のデータを通して、現実的に、

- ①何が起きているのか？ → 談話中／文脈上（表層）での問題発生
- ②何が問題として意識されているのか？ → 文脈下（内面）での問題認知

を分析し、双方が直面しているコミュニケーション上の問題について考える。そして学習者と学習者を受け入れる日本人側双方の、日常の交流の中での学習の可能性を考えた場合、どのような領域に力点を置き設計したらよいか考察する。

2. 調査について

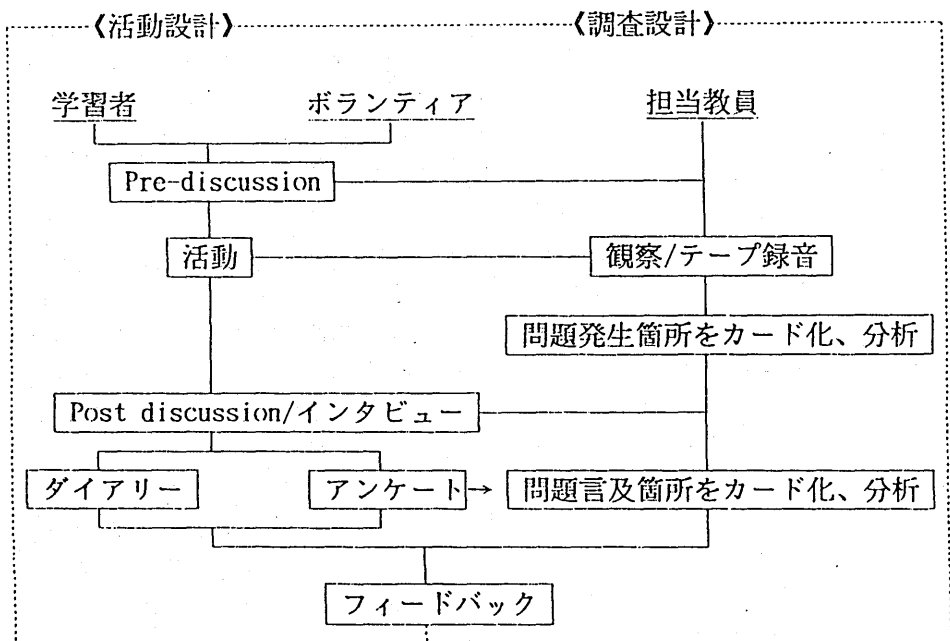
2-1. 調査対象

①技術研修生（マレーシア、タイ、中国の初級学習者5人。来日直後6週間の短期集中オリエンテーションを受けた後、各受け入れ企業で専門研修を3ヶ月～1年受ける）

②ボランティアとして、週1回、学習者との共同活動に参加してくれた一般日本人（ビジネスマン、大学生、主婦など。15人）

2-2. 調査方法

〈活動・調査設計の流れ〉



①日本語学習者（技術研修生）と一般日本人との交流活動をテープ録音し、問題発生箇所をカード化し、分類、分析する。今回、データとしたのは、明確な課題を遂行していくタイプの活動（オリエンテーリング、プロジェクト・ワーク等）ではなく、いわゆるオシャベリ・タイプであるフリートークのものを採用した。

②活動後の一般日本人向アンケートから問題言及箇所をカード化し、分類、分析する。（アンケートは自由記述方式である）

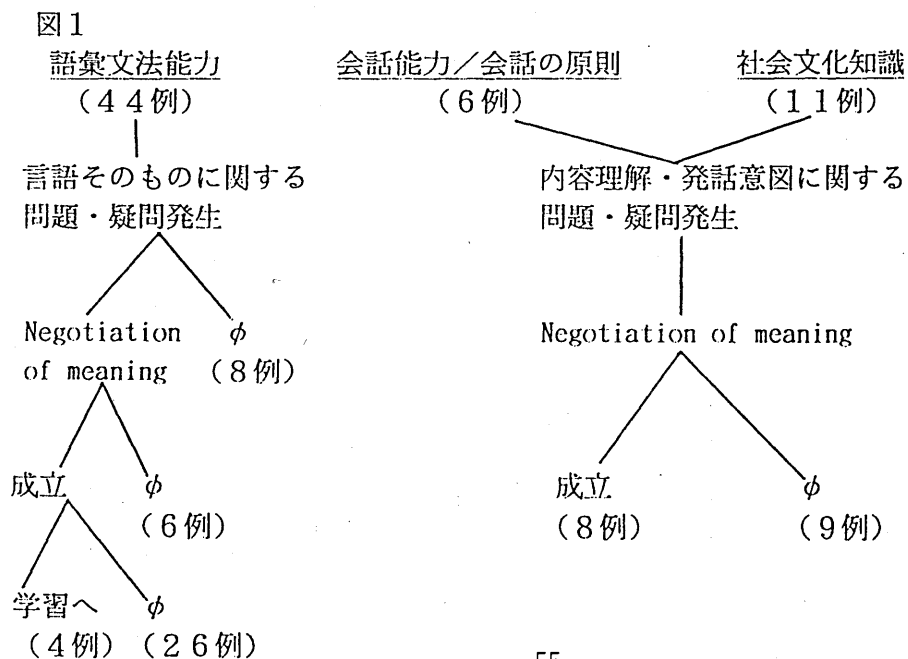
3. 調査結果について

3-1. ①「学習者とボランティアとの会話録音調査」について

カード総数61枚。問題発生 of 要因は大きく三つに分類される。

- 音声、文法、語彙などの言語知識grammatical competenceの不足、誤用によるもの。
- Grammatical competence以外の運用能力、談話構成能力、ストラテジー能力の不足によるもの。または「会話の原則」（Grice1989, Leech1983）の逸脱によるもの。
- 話し相手（時には自己）の社会に関する社会文化的知識・認識の不足によるもの。

問題発生後、a. の場合は言語そのものの修復がなされ、b. 及びc. の場合は、発話の意図・内容の修復に向けられる。問題発生・問題認知の後に意味の明確化・訂正活動等のNegotiation of meaningが行われる。また、何らかの訂正活動が成立した後に、繰り返しやその後の発話での積極的使用、ノート・テーキング等の学習活動を伴う事例がある。以上を、図にしたものが、下記の「図1」である。



め記号は、問題・疑問が発生しても、そのままになっている事例、Negotiation of meaningが行われても解決しなかった事例であり、以下のような特徴がある。

- a. 学習者が誤解したまま話を続け、ボランティアは質問、問いかけを放棄してしまう（7例）
- b. 前提知識の欠如、または前提知識が必要であることに気づかない（4例）
- c. Turn keepingが一方的で、長く、学習者の認知的負担度が高い（4例）
- d. 学習者は話の内容に集中しているが、ボランティアは言葉使いが気になり、文脈がぎくしゃくしてしまう。（3例）
- e. その他（6例）

3-2. ②「活動後ボランティア・アンケート調査」結果について
カード総数162枚。

図2（数字は事例数）

| | 学習者観察 | 相互交渉への言及 | 自分自身への言及 | 計 |
|--------------------------|---------------------------|--|---|-----|
| 発音語彙文法 | 11 | 4 | 3 | 18 |
| ストラテジー | 4 | 30 日本語以外の使用 15 ターンの取り方 10 相従他 5 | 6 言い換え 5 認用訂正 1 | 40 |
| Communication confidence | 10 意欲動機、評価 6 主体性他 4 | 16 交流の可能性 10 交流の対等性 6 | 10 自分の役割 6 かまえ 4 | 36 |
| 異文化(自文化)理解 | 7 振る舞い 6 他 1 | 29 話題に関して 29 | 32 異文化交流観の変化 16 自分の世界の再発見 8 相手の世界への無知 5 日本語の多様性 3 | 68 |
| | 32 | 79 | 51 | 162 |

言及内容を次の二つの角度から分類した。

誰に関して：学習者観察に関するもの、自分自身に関するもの、学習者と自分との交渉に関するものの三つに分けられる。

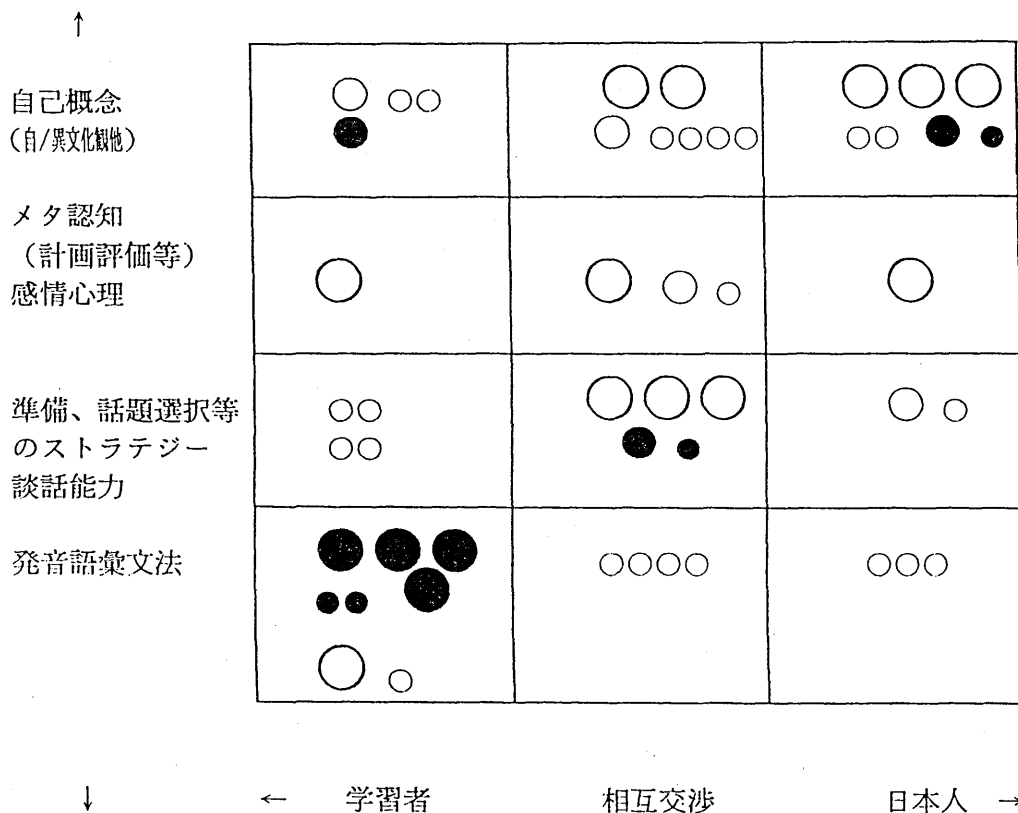
何に関して：発音語彙文法に関して、コミュニケーション・ストラテジーに関して、Communication confidenceを形成する態度姿勢感情など心理的情意的な事柄に関して、異文化（自文化）理解に関しての四つに分けられる。

3-3. ①②の調査結果の比較

数量的には、①②は事例数が違うので比較にならないが、問題領域の分布が、談話資料では顕著に言語項目的な領域により、活動後の内省資料になると、より大きな単位である談話やストラテジーの領域、また自己の学習の可能性へと向かっていることがわかる。談話生成中は、初級学習者の絶対的な日本語力不足による問題発生に次々と対処しなければならない。一方、活動後、問題発生の際の諸要因を内省・分析する時は、個々の語彙文法の問題より、活動全体の流れ・活動内容の充実感・達成感に関わる問題に着目し、その原因を考えている。

図3「①②の比較対象」

○…10事例、○…5事例、○…1事例。黒丸は調査①「談話中の問題領域」、白丸は調査②「活動後、内省での問題領域」。

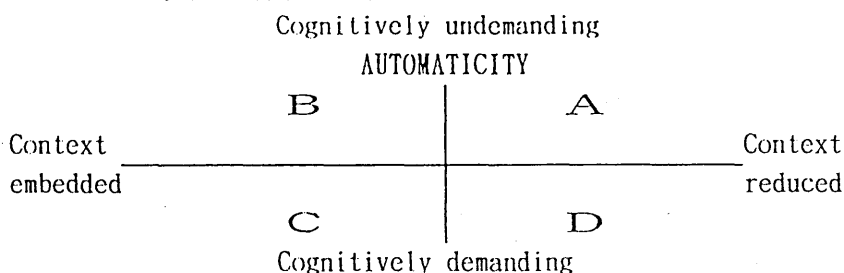


4. 調査結果分析と考察

4-1. 共話について

Negotiation of meaningを通して、学習者と日本人が互いに不足している部分を補い合いながら、会話を展開していくコミュニケーションの形態をここでは「共話」と呼ぶ。不足していることとは、言語知識であったり、社会文化的知識・認識であったりする。

文脈の明示性と頭にかかる負担度の関係(Cummins1984)



Cummins1984の図でいえば、学習者は多くの場合、Dの象限にいる。つまり知的に負担を強いられ、かつ文脈がつかみにくい状況に置かれている。同時に、外国人に慣れていない日本人にとっても、文脈を維持展開しにくく、理解可能化のために常に知的に負担がかかる状況である。両者が協力して、会話を創造していく共話の方策に関して、データから考察する。

4-2. 共話を成立させる諸要素について

a. フォーリナー・トークの技術

フォーリナー・トークなどの会話のストラテジー(例えば、志村1989)に関わる領域は、日本語教員がそうであるように、ある意味で、慣れ、の部分がある。ボランティアも、回数を重ねるに従って、学習者の日本語能力に合わせて、スピーチレベルをコントロールできるようになってくる。調査①に見られる、Grammatical competenceに起因する談話中の問題のかなりの部分は、適切なフォーリナー・トークの使用によって解消される可能性がある。

b. 話題について

しかし、活動後アンケートに見られる問題領域に関しては、単に、speaking skills を身につけただけでは解決できない。

「コミュニケーションを考える時、『どの言語で話すか』または『流暢さ』と同時に、『何を話すか、何を分かち合えるか』というコトバ以前の問題が非常に重要であると思う」(ボランティアのアンケートより)

『何を話すか』に関して言及している事例は29例(18%)あり、以下のような指摘がなされている。

・「あまりよく知らない国の方と話す時、何を聞く時でも、学習者にとって気持ちよく答えられる話題であるかどうか不安になる」

→話題の安全性

・「～について、当方にこの方の知識に乏しく、中途半端になったのではないか

と少し気にかかります」「～についての情報等があまりないので、退屈させてしまったような気がします」

v s.

「学習者の方が、こちらよりもその話題については詳しく、かつ話してみたいという気持ちを起こさせるようなもので進めた」

→先行知識はオシャベリ成立の前提条件か

→日本人同士のオシャベリと同量の先行知識が必要なのか

・「リーダーシップを取れる方が、題材を豊富に用意しておくべきだと痛切に感じた」「何かテーマ、話題を準備して臨んだ方がよい」

v s.

「特に質問など準備しない方が、real communicationができてよい」

→話題を準備することは、可能か

→話題を創造するストラテジーは学習可能か

・「文型練習に振り回されただけ・・・習った文を使いたいという感じです」
「(学習者の質問は)知っている単語を駆使したものであるので、必ずしも(学習者が)興味をもっていることではないようでした。従って話が生きていなかったと思います。趣味の話をした時は、生き生きしていました」

→内容と運用練習の両立は可能か

→初級において、不審尋問的質疑応答を回避するには？

c. 日本語以外の伝達手段の使用

初級学習者とのコミュニケーションにおいて、日本語だけで意味を伝え合うのは困難である。現実には、さまざまな伝達手段が使われているが、それに対する評価は以下の通りである。使われている手段としては、英語・中国語・漢字・ローマ字、ノンバーバル、実物写真絵などの利用。

・「後半、学習者が英語で話すことが多くなった。伝えたいという気持ちが先行して、こちらが日本語で返しても、気がつかないようだった」

→内容に夢中になると、伝達道具である言語は、使いやすい方になる。

・「私も知っている限りの中国語を動員させての筆談に巻き込まれてしまった。筆談に頼るあまり、『洋服→ヨーフク』と発音すると教えても、結局発音してくれなかった」

v s.

「漢字による筆談に頼らざるを得ない場面もありましたが、その言葉については話を中断してでも、二～三回繰り返し発話してもらってお互いに確認して進めていった」

→英語、漢字などを使っても、そこで繰り返し、ノート・テーキングなどの学習を展開できる場合と、その余裕のない場合とがある

・「・・・本当に日本語を必要としているのでしょうか。時折そういう疑問をもちます」 →外国語を、特に、話すことに関しては、心理的な問題が大きく関与してくる

・「初心者とのフリーディスカッションでは媒介語の使用は避けられないと感じ

た。日本語だけでは、お互いストレスを感じてしまう」

→意味を確定し、ストレス・フラストレーションを残さないためにも、複数の伝達ルートを使えるのは、重要である。工夫するのは、それをどのように学習にもつなげるかである。

d. 様々なレベルでコミュニケーションが可能だということの体験と意識化

学習者、日本人双方にとって、言語知識の非常に限られた段階（例えば、学習開始3日目）でも、方策と意欲さえあれば、コミュニケーションが可能だと、体験を通して知ることの意味は大きい。

・「言葉だけに頼らないでコミュニケーションできたことは、私の経験でも印象深いことです。初対面の人と話す時、一歩前へ踏み出して会話できる気がします」

・「今まで、日本語が全くできない外国人と話す際は、コミュニケーション不可とすぐに見切りをつけ、適当にやり過ごすのが常だったのに、今回見切りをつけずにアレヤコレヤと手を尽くしたのは、初回大変努力を要したが、非常に印象深かった」

e. 交流活動を通して、学習者の文化社会だけではなく、母文化を再発見する契機になる

・「日本人側の対応の言葉が一つのことを言うにしても実に様々な言い回しがあり、学習者の大変さを改めて実感した」

→学習者の目の高さから日本語を見る時、見慣れた世界が再発見される

・「（師走について）説明しながら、アレレと思った。気ぜわしいという言葉があるように、日本人にはやらなければならないことがたくさんある。そのことについてはちっとも不思議には思えないのに、いざ説明するとなると、オヤッと思ってしまう」

→自分の皮膚のような世界が説明不可能だという体験

f. その他（彼我の社会の単純な比較の保留など）

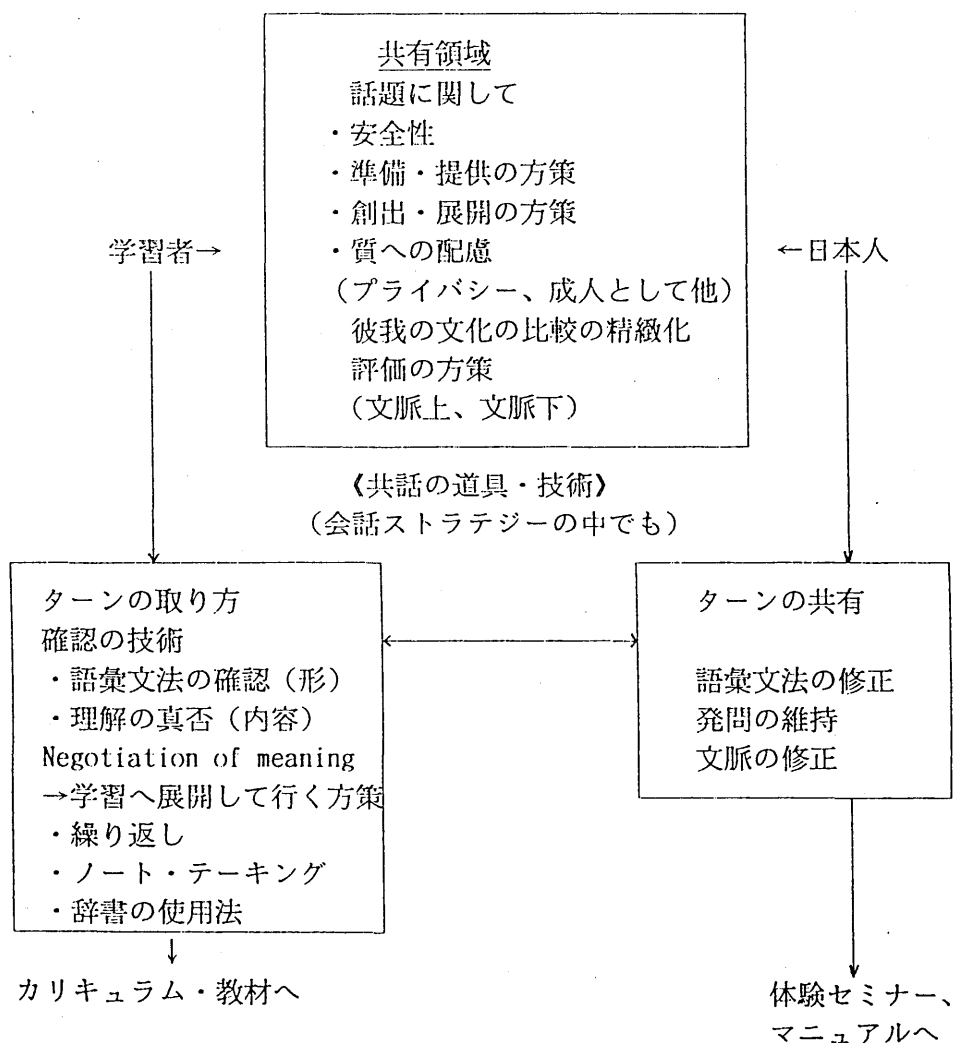
4-3. 共話を可能にする活動設計試案

調査①②の分析結果は、

- ・日本語教育現場：カリキュラム・教材へ
- ・外国人受け入れ現場へ

フィードバックする計画である。どちらの現場においても、共話の可能性に関する意識化と、実現化へ向けての具体的な言語運用技術の習得の両面が必要である。つまり行動目標として共話の実現、シラバスとして共話の技術と意識化、そしてカリキュラムの中に理念の紹介・体験・評価の各段階が織り込まれているというのが骨組である。

《意識化》



5. 今後の計画

5-1. 調査計画

今回までに、

- ①学習者とボランティアの相互交渉の録音データの分析
- ②活動後のボランティアの内省評価の分析

を、行ってきたが、今後、

- ③学習者の活動後内省評価のデータ分析
- を、加えて接触場面の全体像の考察を進めたい。

5-2. カリキュラムへ

従来のカリキュラムは、教室で教師が教科書の言語知識・運用力を一方的に指導・訓練する「クローズド・カリキュラム」(注)である。

(＜教室：教員→教科書←学習者＞)

今後、短期プログラムや散発的な学習の機会しかない人を日本語教育が対象とすることを考えると、現実社会との豊富な交流の中で、学習の可能性を追求する「オープン・カリキュラム」(仮称)を提案したい。「オープン・カリキュラム」は、「クローズド・カリキュラム」の持つ訓練機能の長所を生かしつつ、学習者が日々触れる一般日本人・一般メディアとの接触に関して、《開かれた状態》をつくることをめざす。具体的には、地域ネットワーク(ボランティア・グループ、公共機関等)、教育ネットワーク(小中高大学、専門学校等)、専門家ネットワーク(外国人受け入れ機関等)との連携と、共同活動実施に当たっての、オリエンテーション→実施→評価→フィードバックの一連の設計に関する試行・評価を進めていきたい。

(注)丸山敬介は、総括テストの実施法に関して、

「日本語教師のみの集団内部で作成・実施が完結し外部の協力を仰がないテスト」を、「クローズド・テストClosed Test」と呼び、「学習者と専門を同じくする日本人ビジネスマンがテストの作成・実施に日本語教師と対等な立場で加わる(日本語教師集団のみならず外部の協力を仰いだ)テスト」を「オープン・テストOpen Test」と呼んでいる。(「専門家との共同実施形態による総括テストの試み」『同志社女子大学 日本語日本文学 第4号』1992.10)

引用文献

- Cummins, J. 1984. Bilingualism and Education: Issues in Assessment and Pedagogy. Multilingual Matters
- リーチ、G. N. 1983. 「語用論」紀伊国屋書店
- 志村明彦 1989. 「日本語のForeigner talkと日本語教育」『日本語教育』68
- 谷口すみ子 1989. 「会話教育のシラバス作りに向けて」『日本語教育』68